



藤村 安治 区長（今城）

みんなが戻って 来られるように—

震災から1年が経ち、今の生活に落ち着きつつある中、仮設住宅やみなし仮設住宅に住む人、家を修理して住んでいる人たちなど、暮らしの形が変わってきました。震災当初は、（前震時）今城区を全て安否確認しました。近くの公民館に避難したり、駐車場などで車中泊をしてその日を過ごしました。そして起こってしまった本震。居ても立ってもおれず、近所の人たちとスポーツセンターに避難。1ヵ月間ほど過ごして熊本市内のみなし住宅に4ヵ月間入居、そして現在、今城に帰り生活しています。

みんなに戻ってきてほしい—その思いが強くなりました。高齢化が進む中、復興を目指すために、自分たちだけではどうにもできないところにきています。今城区の中を通る道路の拡

張や水路の整備、それに伴う擁壁の撤去など、住宅を再建することは困難を極めます。みんなが戻ってこられるような環境づくりをすることが大事だと思います。

人と会う機会が少なくなりました。やはり、“話す”こと、そして“地域コミュニティ”の大切さを実感しました。今後は、仮設住宅と地域とのつながりが大切になると思います。今年は今城の春の区役を実施しました。参加者は少ないと思っていましたが、当日は仮設住宅やみなし住宅の人も含め、たくさんの人に参加していただき、“今城”という地に愛着があるんだと思いました。長い年月がかかっても、復興のために、こういったみんなの想いを大切にしなければいけないと思いました。



▲倒れた家屋が道を塞いでいる（震災後写真）



▼周辺は解体し、周りを見渡せる（解体後写真）



▼解体が進み、さら地が目立つようになった（今城）

あの時は—そして あれから1年—

震災直後は、倒壊した建物が道を塞ぎ、公共のインフラの電気や上下水道、ガスも使えませんでした。食べ物も満足にない状況で、寝る場所もなく避難所や車の中で過ごしたことを覚えています。

あれから1年。公共インフラも復旧し、住居も仮設住宅やみなし仮設住宅などでの生活に変わり、各地域ごとに新たなコミュニティも誕生しています。町でも新たなまちづくりに向けた動きが始まりました。

熊本地震から一年 被災地は今—

今城区—熊本地震により被災した地区の一つ。震災前は、90戸存在していたが、平成29年4月30日時点で、57戸が解体されており、地震の被害が凄まじかったことがわかる。

